

藻類養殖漁場環境調査

池脇義弘・住友寿明・平野 匠

鳴門市北灘町～阿南市中林町地先におけるアマノリ及びワカメ養殖漁場において、養殖期間中の水質環境を調べ、漁業者が適切な養殖管理を行うための漁場環境情報を提供する。

方 法

調査は図1に示したアマノリ養殖漁場12点、ワカメ養殖漁場19点において、平成29年10月から平成30年3月の間、月2～4回の調査を実施した。

徳島県海苔研究部員及びワカメ養殖業者が採取した養殖漁場の表層水の塩分、無機溶存態窒素（DIN）及びプランクトン密度について調査した。塩分測定にはデジタルサリノメーター（MODEL3-G：鶴見精機社製）を用いた。また、試水をGF/Cフィルターで濾過した後、自動流れ分析装置swAAt（ビーエルテック社製）で栄養塩を分析した。また、植物プランクトンのうち、*Coscinodiscus waiLesii*、*Coscinodiscus* sp.、*Eucampia zodiacus* を計数した。結果は速報として、関係漁協に情報提供するとともに、水産研究課のパソコン及び携帯電話向けホームページに掲載した。

結 果

各調査地点のDIN濃度と塩分濃度をそれぞれ表1、2に示した。

12月中旬から3月上旬に塩分は、調査海域全体で高めに推移したが、10月中旬から11月中旬及び3月中旬以降の期間の塩分は、吉野川河口周辺から紀伊水道南部海域で低くなった。

DIN濃度は、10月中旬から11月上旬の期間は調査海域全体で $3\mu\text{M}$ 以上と高かったが、11月中旬以降、吉野川河口周辺から紀伊水道南部海域で急激に低下し、 $1\mu\text{M}$ 未満のきわめて低い値になることもあった。これらの海域でDINが低い状態は2月末まで続いたが、3月以降は回復傾向を示し、 $10\mu\text{M}$ 以上になることもあった。播磨灘から鳴門海峡周辺のDINは調査期間中徐々に低下し、3月以降はほとんど調査地点が $2\mu\text{M}$ 未満になった。DINが $10\mu\text{M}$ 以上になる場合には、塩分濃度の低下が見られ、陸水の影響でDIN

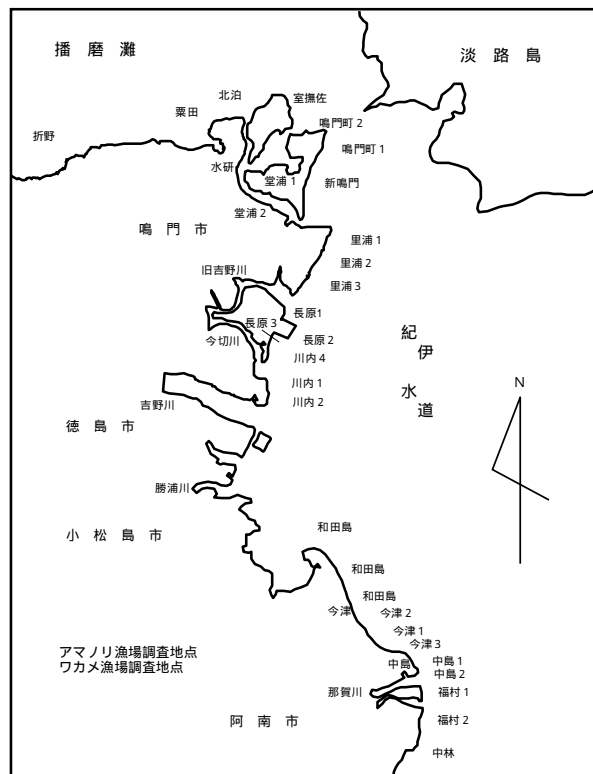


図1.調査地点

が高くなると考えられた。

色落ちの原因となる*C. waiLesii* は、11月上旬に吉野川河口周辺から紀伊水道南部海域で急増し、多いときは1L当たり5,000細胞以上になることもあったが、12月以降は急減し、ほとんど出現しなかった。

E. zodiacus は、1月上旬から吉野川河口周辺から紀伊水道南部海域で増加傾向を示し、2月上旬には、多くの地点が1cc当たり200細胞以上になり、1cc当たり数百細胞を超える地点も見られた。一方、播磨灘から鳴門海峡周辺では、この期間、*E. zodiacus*はほとんどみられなかった。3月以降、吉野川河口周辺から紀伊水道南部海域の*E. zodiacus* は次第に減少し3月下旬にはほとんど見られなくなった。

なお、本調査は、漁場改善実証事業の漁場生産力低下の原因解明の結果の一部でもある。

